

オランダの学部編入して

University College Utrecht 五十嵐 彰

IGARASHI Akira

こんにちは、五十嵐彰です。僕は現在オランダの University College Utrecht という大学で学部生として勉強しています。元々は立教大学で勉強していたのですが、オランダでの交換留学を経て今の大学への編入を決意しました。ここで強調しておきたいのは、僕はいたって平均的な日本人だということです。帰国子女ではもちろんありませんし、海外はおろか大学に入るまで故郷の北海道から数回しか出たことがなく、英語も人並みでした。そんな学生がなぜ、どのようにオランダの学部編入したのか、また現在通っている大学についてを、簡単にここに記したいと思います。少し英語を頑張れば、日本人にとって海外の学部留学というのは決して手の届かない夢の話ではないと思っています。これを読んだ方が、自分の選択肢の一つとして、また知り合いに勧める進路として、海外の大学を視野に入れていただければ幸いです。

学部編入の経緯と方法

立教大学の3年半ばに、1年間の交換留学プログラムでオランダのライデン大学に留学しました。ライデン大学は僕が留学した年に創立435周年を迎えたオランダ最古の大学です。そんな大学で勉強し始め3ヶ月が経ったあたりで、このまま帰っていいものか漠然と考えるようになりました。オランダの勉強量は日本の大学と比べて圧倒的に多く、他方僕は元々日本の大学にいたころから英語の論文を1日1本読んでいたので、所属学部で最も難しいと言われるゼミでさえ退屈でした。帰国しても自分のために勉強するというより卒業まで時間をつぶすだけだという実感がありました。そんな時、友人から軽く「編入してこのまま残ったら？」という話をされました。人生の岐路になった一言です。

編入を即決

決断をするのに時間はかかりませんでした。当時休学して交換留学をしていたため、このまま日本に帰っても卒業まで1年半を費やさなければなりませんでした。編入先のオランダの大学は本来3年制、単位互換で2年での卒業も可能ということで半年の遅れがあるだけです。学費に関しては後述しますが、生活費等を含めても日本とそこまで変わらないというのが実際のところでした。

編入に必要な書類は、自己推薦状、成績証明書、教授の推薦状、簡易履歴書、英語の成績証明(TOEFLやIELTSなど。IELTSの方がよい点を取りやすいと教えられそちらを受けました)です。自己推薦状は英語ではモチベーションレターといい、自分がいかにやる気のある学生であるかを示します。このレターに書く内容は面接でも突っ込まれるので、これを中心に面接対策を考えます。成績証明書と同時に日本での授業のシ

ラバスを英訳したのも提出しました。全部で26ページにもなりましたが、かなり効果的でした。

書類を提出して1次審査に合格すると、面接に呼ばれます。僕の面接官は素敵な人で、「天気がいいから外で話しましょう」と屋外のベンチへ僕を連れて行き、お互い足を組んでコーヒーを飲むという非常にリラックスした面接でした。面接官によって聞く内容は様々ですが、僕の場合は自己推薦状に書いた内容を多少突っ込まれ、編入先の大学で何を不得て将来どう活かしたいか、というだいたい月並みな質問をされました。人によっては「無人島に何か一つ持っていくとしたら何か」など、日本の就活のような質問をする人もいます。個人の体験から一般化できませんが、自分の中に一つ一貫した考えがありそれを相手が理解できるように表現できれば面接は問題ないと思います。

ちなみに交換留学で通っていたライデン大学ではなく、University College Utrechtを編入先として選んだ理由の一つには、オランダで英語のプログラムがあるのはこのUniversity Collegeという名前がつく大学だけだからです。普通の総合大学の多くはオランダ語のプログラムで、僕のオランダ語運用能力では数も数えられませんでした。この大学がUniversity Collegeの中で最も歴史が古くノウハウがあるというのがあります。古いと言ってもたかだか10年ですが、この大学がオランダに及ぼした影響は大きいと言われています。

学費は日本並

「海外の大学」は学費が高いという神話はなんとも気持ちの悪いものですね。ここで想定されている「海外」とはアメリカのことでしょうが、一般的に日本より学費の高い国は、アメリカ・イギリス・オーストラリア・カナダの一部くらいです(全て調べたわけではないので誤っている可能性もあります)。オランダの大学の学費は、リベラルアーツ系大学でNon-EU学生で8,700ユーロ(ちなみにEU学生は1,700ユーロ)です。医学部を抜かした総合大学もほぼ同じだと聞きます。オランダの大学は学生を一人入学させるごとに政府から助成金が出るので、奨学金は望めばおそらくほぼ確実にもらえます。手順としては、入学申請時に奨学金の給付を同時に申請し、入学後家庭の経済状況を書面で告げれば完了です。源泉徴収による証明や面接など必要ありませんし、それに給与なので返済しなくて良いのです。僕はこれで年間4,000ユーロをもらい、学費の一部免除に充てています。2012年6月現在のレートでいけば、日本の国公立より安い学費で通っています。奨学金を毎年もらうためにはGPA3.0以上をとり続けなければなりません、そこまで難しい話ではありません。

なぜオランダか

個人的に「なぜオランダか」という質問が一番嫌いです。これを聞いてくる方々の頭にはだいたい「留学といえばアメリカかイギリス」という先入観があると思っています。

オランダ人は英語ネイティブではありませんが、幼少から英語に親しみ、非英語圏

での英語テストでは世界2位に入る実力です。彼/彼女らの書く英語の論文は非常に機能的で、無駄な修辞や言い回しが一切省かれています。非英語ネイティブにとってこれ以上読みやすい文章はないと言っていいと思います。伝えることが第一目的である以上、非英語ネイティブの日本人として目指したい英語の書き方です。

大学の勉強とシステム

他とはちょっと違うリベラルアーツ

University College Utrecht はリベラルアーツ教育を標榜していますが、アメリカのカレッジとは違い専門は絞らずに卒業します。社会科学、人文科学、自然科学の三分野から一つ選んで、一つの分野につき2専攻以上を卒業要件としています。例えば僕は社会科学で、心理学・政治学・社会学を専攻、統計学を副専攻としています。授業は1から3にレベル分けされていて、専攻とするにはレベル3の授業をパスする必要があります。学部で専門的に深く勉強したい人には向いていないかもしれませんが、僕の場合知識を広げておきたかったのが好都合でした。

1クラスには最大でも25人しか参加できません。大教室での講義はいくつかありますが、少人数のワークショップが必ずついてきます。そのため各学生は自分の考えを発信することを期待されています。事前に課題図書を読み、準備した上で授業に参加します。



University College Utrecht

ちなみに授業は1 Semester あたり4つ取ることができ、一つの授業につき週2回クラスがあります。授業時間のみで言うと日本の学生のほうが勉強していますね。こちらでは授業外で求められるものが多いです。オランダの大学の規定で授業を含めた週あたりの勉強時間数は40時間となっています。僕の大学はそれより15時間多いので「オランダの大学の勉強量」と一般化できるものではありませんが、年間の勉強量を記します。

プレゼン：13回

ライティング：約25,000ワード

リーディング：約7,000ページ(レポート用の参考文献含む)

こんな感じです。アメリカなんかでよく言われる、週に本1冊読んでくるという程ではありませんが、やっている側は情けなくも必死です。週に3回プレゼンが重なっ

たときはもう逃げ出したくなりました。

サポート制度

学生一人につきチューターが一人つきます。彼/彼女の役割は、主に学内機関と学生との橋渡し役です。例えば学期半ばに各教授から受け持ち学生のフィードバックをもらいその内容に関して学生と相談する、学生がオフィスと問題を起こした場合第三者としての学内カウンセラーに調停を依頼するなどです。大学に英語ネイティブはほぼいないため、ライティングセンターという機関も非常に重要な役割を果たします。提出前のレポートに目を通し、文章作成における学生の弱点を指摘してくれます。

もちろんこの大学も良いことばかりではありません。少人数制なため自分の取りたい授業を必ずしも取ることができません。中には多忙なため半分しか授業を施さない教授や、課題図書の内容を授業中に口頭で伝えるだけの教授もいます。授業選択の場でチューターとの衝突もあります。勉強をしないで課外活動に精を出しすぎている学生や、テスト前日にパーティーで騒いでいる学生、グループワークにまるで貢献しない学生もいます。ただそれらを差し引いても、「勉強しなければならない環境」というのは日本ではなかなか得難いため、助かっています。

海外学部入学の意義

海外の大学院はよく聞きますが、海外の学部入学はそこまでポピュラーでもないと思います。あったとして交換留学です。交換留学に関しては、自分が行っていた身ですが、少し懐疑的です。単位数だけ見れば日本の大学は3年間で卒業可能であり、1年間の留学で単位を一つも取らずに終えたとしても制度的には支障ありません。現に交換留学をしている知り合いの多くはかなりの数の授業をさぼっています。もちろん留学の意義を国際交流におくという声もあり、単位をしっかりと修めて帰る人も多くいるため、一概に意味のないものだとは言いきれません。ただ制度的に授業を修めるというインセンティブが欠けている点、そして何より1年間という期間の短さから、個人的に学部からの海外留学をお勧めします。

ただここでネックになるのが海外大学への奨学金の少なさです。大学院の奨学金は比較的充実していますが、学部入学・編入の奨学金はまるでスポットが当たっていません。さらに学費が世界一高いアメリカの大学が最も留学先として強調されているため、留学生が増えるという観測は持てそうにありません。僕を含めたアメリカ以外の海外組が情報を適切に発信すること、そして奨学金の拡充が求められていると思います。

日本から出るとのこと

日本の外に出てよかったと思うことは、英語や勉強量もそうですが、人とは異なる視点を得られたことだと思っています。例えば移民の話をするときに、日本だと日本語の出来や相手に感じる心理的な違和感に終始しがちですが、オランダだと宗教の話がかなり早い段階で入ってきます。他方日本人の大好きな集団主義・個人主義の話は

この2年間で聞いたことがありません。一度だけ英語でその話題を扱った論文を読みました。それも執筆者が日本人でした。もちろんここで得た視点がそのまま世界中で通用するわけではありませんが、別の新たな視点を得るのに抵抗感がなくなるという意味では非常に重要な一歩です。

海外に出るということそれ自体が絶対奨励されるべき価値だとは思いません。先述したように留学していてもあまりしっかりしていない人もいますし、日本で自分の道を追っている人もいます。自分のやりたいことが日本でしかできないという積極的な意味で日本の大学や機関を選ぶ人は素晴らしいと思います。ただこういった「なぜ日本か」という問いに答えられない場合や新しい選択肢を探している場合、日本の外に目を向けることも一つの手だと思います。意外と選択肢は多く、しばしば既知のものより得るのが簡単です。自分がこの場にいる理由がわからなくなったり、行き詰まりを感じたりしたら、少し情報を見てみてください。もちろん海外だけではなく、日本国内にもきっと何かあります。



ユトレヒトの町並み

最後になりましたが、いつも惜しめない支援・応援をしてくれる家族と友人に感謝の辞を述べ、この文章を終わります。最後までおつきあいしていただき、ありがとうございました。

五十嵐 彰

University College Utrecht

E-mail: a.igarashi@students.uu.nl

Facebook: <http://www.facebook.com/akira.igarashi.10>